

立教大学とポール・ラッシュの精神＝「本気になろう、本物であれ」

宮崎 光

立教大学における「ボランティア」活動の歴史の端緒に、ポール・ラッシュ(1897-1979)の名が記憶される。「清里の父」と呼ばれて高冷地開拓事業に専心し、また「アメリカンフットボールを日本に紹介した」ことでも知られる彼の後半生は、立教大学教授時代の出会いと経験が基盤となっていると考えてもよいだろう。ポール・ラッシュが1953年に書き留めた「直筆手記 Memorandum」から、彼の心の動きに関心を置いて、そこから私たちが受け継ぐべき精神を確認しておきたい。

ホテル経営の夢を描いてケンタッキーからニューヨークに出てきたポールは、そこでYMCA(キリスト教青年会)の海外派遣の話聞き、「旅がしたくてうずうずしていた私には、行先は日本でもイスラエルでもよかった」と受諾。関東大震災から一年半が経過した1925年4月、27歳のポールは横浜に到着する。同船した客らと「夜の盛り場を歩き回ったのが、日本のYMCA職員に悪い印象を持たれることになってしまった」と述懐する。結局YMCAは一年で辞し、帰国を考えたポールに、立教大学で教師をすること、教会組織の経理を担うことが、日本滞在中に通った聖三一教会のビンステッド司祭から持ちかけられる。ポールは、「教会の仕事をするような立派な人間ではない。教師や宣教師の仕事など、およそお門違い」と固辞するが、立教大学にも深く関与するマキム主教らとの面談で、「一年間、われわれを試してみないか。私たちもきみを試す。一年たってお互いにうまが合わないと分かったら、帰国すればいい」と言われ、彼は心を動かされる。手記には、その時の率直な気持ちが記されていた。「私には反論のしようがなかった。確かに私は十分に若かった。一年くらい無駄にしても構わない。日本人は嫌いじゃないし、日本人も私を気に入ってくれているようだ。私の負けだった。この時点で、ホテル業界は、将来有望な逸材を一人失ったかもしれない。私の残りの人生は、こうして決まった。」

立教大学で教えるようになって一年、学生たちが洗礼を受けることになった折、ライフスナイダー主教から、「ポール、この学生たちはきみの教え子だ。クリスチャンとして自信をもって生きて行けるように、支えになるものを与えてやってほしい」と言われ、彼はそこから「生まれて初めて精神的責任を負われた」との自覚を持つ。そして、米国から取り寄せた教会諸活動のパンフレットや資料の中から、「祈り Prayer」と「奉仕 Service」と書かれた「BSA(聖徒アンデレ同胞会)」を見つけ、これを1927年に学生たちの活動体として設立する。

最後に、ポールのモットーであり、若者たちに伝えた言葉、“Do Your Best and It Must Be First Class”「最善を尽くせ、一流であれ」に言及しておく。これは聖路加国際病院建設の募金に尽力した1928年からの四年間、彼がトイスラー博士からたたき込まれた精神である。「日本で、キリストの御名によって何かを築くときは一流のものを築け。人々には最高の伝統を示せ。二流ではだめだ」と。私がポールの「直筆手記」から感じたのは、出会う人や状況に向き合うことで変化してゆく、彼の心の素直さである。ポール・ラッシュは、日本に生きる中で「本気」になった。そして常に、その時局において本当に大切な物事を見据え、実行した。この精神を私たちは、「本気になろう、本物であれ」ととらえ直して受け継いでゆきたい。

* 「直筆手記 Memorandum,1953」は、『清里に於いて—ポール・ラッシュが書き遺した「奇跡の軌跡」』(財団法人キープ協会編訳・出版、2003年)より

(大学チャプレン ボランティアセンター副センター長)